

『ジョイ・ラック・クラブ』の幻想性について

野 崎 重 敦

序 論

1976年に『チャイナタウンの女武者』(*The Woman Warrior*)を発表して一躍中国系アメリカ人作家の代表的存在となったマクシーン・ホン・キングストン (Maxine Hong Kingston) の作品においては、中国は多くの部分で後進的で暗黒の世界であるように描かれていたといえる。代表的な例が、社会的に女性の人格が尊重されていないことであり、その姿勢はアメリカの中国人コミュニティにまで強く浸透している。また、人間の考え方を離れた点でも、中国は怪奇的なほど未開的・呪術的世界として提示されている。そのことは中国にいた頃の主人公の母親が遭遇する化け物や、小説の中に差しはさまれる怪奇譚的挿話に典型的に現われている。

しかしキングストンの10数年あとに登場したエイミ・タン (Amy Tan) の『ジョイ・ラック・クラブ』(*The Joy Luck Club*, 1989) ではどうであろうか。E・D・ハントリーが中国系アメリカ文学の歴史を概観するなかで指摘しているように、キングストンやタンなど中国系作家への批判は中国系コミュニティー内部からのものが最も辛辣な場合が多く、コミュニティーに対する裏切りとか、主流社会への迎合として非難を招きやすい (Huntley: 57-58)。たとえばシンシア・ウォンがタンの作品について中国語の使い誤りなど、中国文化への理解不足を数々指摘している (Wong: 54-57)。ウォンはタンの人気の秘密は多分に主流社会の読者のオリエンタリズム的関心に帰せられると考えているようで

ある。しかしタンの魅力の秘密は、キングストンからの中国に対する姿勢の変化にあり、そうした変化は小説の最後で中国人としてのアイデンティティや帰属意識が強調されていることから察せられる。アメリカでの主流のなかでの疎外に対する中国人としてのアイデンティティの発見という文化的癒しのテーマが、ウォルター・シアが強調するように明らかであり (Shear: 49-50)、それはこの作品における幻想性のあり方にも現われているように思われる。以下ではこうした点を考察していくことにする。

I. アメリカの中国系社会

『ジョイ・ラック・クラブ』は、カリフォルニアに暮らす四つの中国系の家族についての物語で、移民第一世代の女性たちとそのアメリカ生まれの娘たちがかわるがわる語り手となって、自らの人生や思いを明らかにしていく。この作品は大きく四つの部分からなり、第一部と第四部は移民第一世代の女性たち、つまりスーユアン・ウー (Suyuan Woo)、アンメイ・シュー (An-mei Hsu)、リンド・ジョン (Lindo Jong)、インイン・セント・クレア (Ying-ying St. Clair) の四人を中心とする部分であり、第二部と第三部は、それら四人のそれぞれの娘たちをめぐる展開する。女性たちの中でも中心的な登場人物はジンメイ・ウー (Jing-mei Woo) であり、小説は彼女が亡き母の代理としてジョイ・ラック・クラブに出席するところから始まっている。母親の世代の女性たちと麻雀卓を囲みながら、ジンメイは、皆が母親の思い出に浸るよりも、家族同士の自慢合戦が繰り広げられるのに閉口する。ジンメイと同年代の娘ウェヴァリー (Waverly) がいるリンド・ジョンは、ジンメイの母親との間でずっと娘自慢をし合っていた中で、「私たちが赤ん坊の頃から、二人はおへその窪み具合から耳たぶの形、膝のすり傷の直り方の速さ、髪濃さと厚さ、一年にはきつぶす靴の数を競い合い、長じてからはウェヴァリーがいかにかチェスの名人で、先月はいくつトロフィーを勝ち取り、いくつの新聞に彼女の顔が載り、いくつの都市を訪問したかに自慢の種が移っていった」という (37)。大学を中退し

て、復学の希望を持ちつつ果たせないでいるジンメイは、こうした家族間の対抗心のぶつかり合いの中では屈辱を感じざるを得ず、居心地悪い思いをする。そして、早々にいとまごいをして皆に引きとめられたときにも、「これがジョイ・ラック・クラブのおばさん達の流儀だと私にはわかっている——私が出ていくのを心待ちにしているくせに、実際にそうしようとするとき引き止めるのだ」と苦々しく考える（38）。

親たちの間だけでなく、子供たち自身同士でも、対抗心をあらわにしたとげとげしい関係が見られる。チェスで頭角を現わしたジョン家の娘ウェヴァリーに負けじと、ジンメイはピアノを習わされるが、苦しい家計の中で母親が雇うことができたピアノ教師は耳が遠い上に教え方が下手であったため、ジンメイは時間と努力を無駄に費やしただけであった。そして教会のタレント・ショーで、ジョイ・ラック・クラブのほかの家族も集まった観衆の前で、ジンメイは散々な演奏をして母親を落胆させる。このときはリンド・ジョンもジンメイの母親に対してあからさまに嘲笑することはなかったが、ウェヴァリーはジンメイに、「あなたは私のように天才ではないのよ」とはっきり言い放つのであった（140）。こうした関係は大人になってからも変わらない。正月にウー家でジョン一家を招いて食事会を開いたとき、ウェヴァリーは陰険な仕方でジンメイが自分よりも低級な美容院に通っていることをほのめかしたり、ウェヴァリーが務めている税理事務所のためにジンメイが作った税務サービスについてのコピー文の代金が未払いであることを持ち出されると、その出来の悪さをあてこするといったような調子である（203-05）。このようにこの小説で描かれた中国系アメリカ人の家族は、ジョイ・ラック・クラブに象徴されるように、表面的には仲良く、助け合いながら、一方でお互いに競い合っている。そうした競争が建設的であればいいのであるが、現実には単なる見栄の張り合い、あるいは相手を貶めて優越感や自己満足を得たりといった不毛で不健全なものでしかないとわざるをえない。ジンメイをはじめ中国系アメリカ人の子供たちは、お互いから切り離され、対立する関係に立たされている。彼らは中国系アメリカ人の社会の中で孤独であり、かといって主流のアメリカ社会に居場所を見出すこ

ともできないでいる。そんな状況の中で、ジンメイは結局アメリカ人であるということよりも、中国人であることに生きる力の源泉を見出すことになる。

Ⅱ. 中国の姿

『ジョイ・ラック・クラブ』において、前節で見たように中国系アメリカ人社会は殺伐とした競争、対立、見栄に満ちたものとして描かれている。こうした中国系アメリカ人社会の性格は、その故国である中国に源があると考えられる。そこで、この作品において中国がどのように提示されているかを考察していきたい。

中国を直接知っているのは当然移民第一世代の女性たちである。第一部と第四部における彼女たちの中国についての記憶を見てみることにする。まずアンメイ・シューであるが、彼女は母親をめぐる悲劇を語っている。アンメイは幼い頃、伯父の家で育てられていたが、そこでは母親のことは忘れるように、祖母ポーポ (Popo) を初め、周りの大人から言われていた。実は彼女の母親は、アンメイの夫と死別したあと、家族の反対を押し切ってウーチン (Wu Tsing) という金持ちの男の第四夫人になっていたのであった。キングストンの『チャイナタウンの女武者』でも、夫がアメリカへ出稼ぎにいつている間に不倫をして妊娠した女性が、一族の間でいなかったものとされているという話から物語が始まっていた。いずれの作品も、中国社会の規律の厳しさを、それを破ったときの仕打ちの容赦なさが強調されているといえるだろう。アンメイが9歳のときに、危篤になったポーポに最後の親孝行をするために母親が戻ってくる。そしてポーポが亡くなって伯父の家を出発する朝、彼女はアンメイを一緒に連れていこうとして騒ぎを起こす。伯母はアンメイに次のように言い聞かせる。

女の子は、何のあとについていくかで決まるのよ！アンメイ、あんたは新しい馬車に乗れば何か新しいものが見られると思ってるけど、前にあるのは古いばれた驢馬のお尻だけだよ。あんたの人生は、目の前にあるものと一緒

なんだよ (218)

しかしアンメイはこれを聞いて一層母親と一緒にいこうという決意を固める。彼女にとって伯父の家は、「わたしにとって理解できないごまかしと苦しみに満ちあふれた場所」であったのである (218)。だが、母親と暮らすようになってからも事態が改善されることはなかった。ウーチンの屋敷は豪壮で、第四夫人のアンメイの母親の部屋も伯父の家とは比べ物にならないほど立派であった。だがその屋敷には、夫人同士の目に見えない確執が満ちあふれており、特に第二夫人との感情的対立は激しく、その果てにアンメイの母親は自殺を遂げることになる。こうした中国における社会の在り方、特に一家の体面を守ることの重要性、そこからはずれた者の惨めな最期といったことが強調されている。第二夫人は初対面のとき一見アンメイに好意的で、自分がかけていた真珠の首飾りをアンメイに与え、彼女は「こんなに美しい装身具はふれたことがない」と感激する。しかし、自室に戻ったあと、アンメイの母親は娘から首飾りを無理やり取り上げ、その玉のひとつを踏みつけて壊し、それがガラスであることを示して彼女に第二夫人の本性を悟らせたのであった。第二夫人は阿片を飲んで狂言自殺をはかることで、たびたびウーチンに自分の言うことをきかせ、夫人たちのなかでも最も大きな権勢をふるっていたのであるが、そのためにアンメイの母親に家を持たせるというウーチンの約束も反故にされていたのである。ついに、ある年の旧暦の正月が来る二日前に、アンメイの母親は致死量の阿片を飲んで自殺する。自殺した者の靈魂は死んで三日後に戻ってきて復讐するという迷信から、「正月は新しい年の始まりなので、それまでの借りを返さなければ不幸や災難に見舞われるのは必至だ」と信じたウーチンは最も粗末な木綿の喪服を着て、訪れた母の霊に、彼女とウーチンとの間にできた息子とアンメイを嫡子として育てること、彼女だけを正妻として崇めることを誓ったのだった。その同じ日に、アンメイは第二夫人の目の前で例の偽の真珠の首飾りを足で粉々に砕いて見せた。その日、第二夫人は髪が白くなり始め、アンメイは怒鳴ることを覚えたという (240)。こうしてアンメイの回想は一応、第二夫人に

対する勝利という結末を見るのであるが、この閉ざされた小さな社会において
そうであったように、この小説のどこにも和解や協力といったものは存在しない。
殺伐とした人間関係が繰り広げられるのみである。個々の人間の生き方も
狭く型にはめられており、社会の大きな規律を破って自由な生き方を選んだか
に見えたアンメイの母親も結局は夫人の間の体面の問題から悲劇的最期を選ば
ざるを得なかったということになる。特に女性は、伯母の言うように、「何の
あとをついていくかで決まる」のであり、自分の意志を持とうとすべきではな
いのであろう。アンメイはこうした生き方が自分の娘ローズにも受け継がれて
いることを意識する。結婚生活が破局を迎えようとするのに何もできないでい
る娘に歯がゆさとともに、中国人としての宿命を感じる。

「どうしようもないのよ！選択の余地はないのよ！」と娘は泣いた。何に
もわかっていないのだ。… 努力しなければチャンスは永遠に失われてしま
うのに。

中国人として育てられたから、私にはそれがよくわかる。何も望むな、他
人の悲しみを呑み込め、自分の苦い思いを腹におさめろ、と私は教えられた。

娘にはその逆を教えてきたにもかかわらず、結局は私と同じようになって
しまうなんて！私が産んだ娘だからかもしれない。私もまた母が産んだ娘だ
からかもしれない。私たち親子は、階段のようなものだ。一段ずつ上がった
り下がったりするけれど、みんな同じ方向に進むだけの。(215)

次にリンド・ジョンの場合を見てみよう。彼女の回想の始まりでは、「女の
赤ん坊は価値がないという中国人もいるけれど、それは間違い。」(50) と述べ
られており、女性の人格が尊重される事例が語られるかと思わせるが、その期
待は裏切られる。彼女は可愛らしく生まれたおかげで、自分の家よりも裕福な
家に嫁ぐことができただけのことであった。彼女が2歳のときに婚約が行われ、
許婚は彼女よりさらに一つ年下のティエンユー (Tyan-yu) という赤ん坊であ
った。これは当時、彼女の家族が住んでいた太原の田舎では当たり前であったと

いう。ほかの町では男たちが両親の許しを得て、自分で嫁を選ぶようになっていたが、「太原の母親たちは、息子を立派に成人させ、年寄りに尽くし、母親たちが死んだあとでもずっと先祖の墓参りをするような嫁を選び続けた」のであった(51)。実際にリンド・ジョンが相手の家に嫁いだのは12歳になってからであったが、それまでの間も彼女は家族の中で、もうよその子であるかのように扱われ、ティエンユーの母親ファン・タイタイ(Huang Taitai)に娘としての敬意を示すように躰けられたのであった。そしてファン家に行ってから、まず召使たちと同じ仕事場に連れて行かれて彼らと同じ仕事を教え込まれ、自分の立場を思い知ることになる。ファン家ででの生活の中でだんだんと自分の境遇を受け入れるようになっていく。「ファン家がどうやって私の肌に彼らの考え方を染み込ませたかわかるでしょう。私にとってティエンユーは神のような存在——私の命よりも大切な意見を持つ存在となった。ファン・タイタイは実の母親——喜ばせ、無条件に尽くして従うべき存在となった」と、語るように(56)。16歳になった夏に、正式に結婚式を挙げることになるが、そのときになってリンド・ジョンは自我の覚醒ともいうべき瞬間を経験する。

私は目をぬぐって鏡を見つめた。そこに見えたものに驚いた。私は真紅のドレスを着ていたが、それよりもっと価値のあるものを見た。強く、純粋な自分の姿を。誰にも見えない、誰も取り上げることができない自分だけの思いがうちにあった。... 私は自分に約束した——両親の願いは決して忘れまい、だけど自分のことも決して忘れまい。(58)

こうした決意を秘めたリンド・ジョンは、結婚式を挙げたあともティエンユーを愛することができないと悟ったとき、思いきった行動に出る。彼女は姑からなかなか子供ができないことを責められていたが、侍女のひとりが屋敷に出入りする配達人の青年と逢い引きして妊娠してしまったことに気がつく。彼女は姑に、ファン家の亡き祖父が自分の夢の中に現われて、この結婚が不吉であること、そしてティエンユーが本当に結婚すべき相手はその侍女であることを告

げたと嘘をついたのである。リンド・ジョンは結婚のことを口止めされてファン家から自由になり、北京までの汽車の切符とアメリカに渡れるだけのお金を与えられたのであった。彼女は侍女について、身分違いの結婚ができて喜んでおり、「ティエンユウの妻となった奇跡に打たれて信心深くなった彼女は、年に一度ではなく毎日お墓を掃除するよう召使に命じたという」と読者に報じている(65)。しかし、リンド・ジョンは自分自身のなかには強く感じた自我を、この侍女には認めていないといわざるをえないだろう。やはりこうした周囲の人間への共感の欠如が、この作品の描く中国社会に見られる一般的性質であるといえるように思われる。

三人目のインイン・セント・クレアは、アンメイ・シューとは対照的に、裕福な家の正妻の娘として育った。そしてここにも暖かみのある人間関係は見られない。彼女は躰の厳しい子守女から、「あなたは口数が多すぎる」と注意され、「女の子は質問しないで黙って人の話を聞いていなければならない」と教えられる(70)。しかし、彼女自身も周りに対して優しく接するという姿勢は見られず、幼い頃の回想で、彼女は二人の異母妹、つまり妾腹の妹たちを「二番」(Number Two)、「三番」(Number Three)と呼び、うさぎ形の月餅を分けてやる時も、違いがわからない彼女たちに、あんこが入っていない耳の部分を与えるのであった(71)。また、少女時代の回想でも、「異母妹たちは、うちより格が下がる家の、何の取り柄もない青年との結婚を夢見ていた。彼女たちは望みを高くもつことを知らなかった。私の父の妾の娘だったから」と、冷たく突き放している(245)。そんなインイン自身も、結局幸福な結婚をすることはできなかった。彼女の結婚相手は、家柄は申し分なかったが、不誠実な男であった。彼女が最初の子供を身ごもると、旅に出て不品行を繰り返すようになり、彼女は子供をおろし、実家に帰る。その後10年間ほど田舎の親戚の家に身を寄せて無為な時を過ごしたあと、インインは都会へ出て、最新流行の装いに身を包んで洋服店の売り子として働き始める。そのときにアメリカ人のクリフォード・セントクレアに出会い、彼の求婚を受け入れてアメリカに渡ることになったのである。

四人目の移民第一世代の女性はジンメイ・ウーの母親スーユアン・ウーである。そもそもジョイ・ラック・クラブの集まりを始めたのは、彼女であった。まだ中国にいたときに、国民党軍の士官と最初の結婚をしていた彼女は、日本軍の攻撃から疎開して桂林に滞在していたのであったが、そこでこの会を始めたのであった。ジョイ・ラック・クラブの誕生の経緯は、この会が中国社会、ないしはアメリカにおける中国系社会の性質を典型的に表わすものであることを示唆する。戦争の被害を避けて、当時の桂林には毎日数千人の雑多な人々が流れ込み、住処を求めて道にあふれかえっていた。こうした人々のことをスーユアンは次のように描写している。

まるで残り物がごったになったような町だったわ。日本軍のことがなければ、こうした種々雑多な人々の間でいつ喧嘩が起きてもおかしくない状態だったのよ。わかるでしょう？ 上海人と北辺の農民、銀行家と床屋、車夫とビルマの難民の間でね。誰もが他人を見下していたわ。みんなが同じ歩道に唾を吐いたり、同じ急性の下痢で苦しんだりするのは構わないのよ。みんな同じように臭かったけど、誰も相手のほうがもっと臭いと文句を言ってたわ。(22)

こうした状況のなか、夫とも離れ孤独な彼女はジョイ・ラック・クラブを始めたのであった。彼女と同じように陸軍士官の妻とほかに金持ちの二人の女性とともに毎週、「お小遣い稼ぎと気晴らしのために」、交替で場所を提供してマージャンをすることにし、当番は毎回贅沢な食べ物を用意するのであった。そしておなか一杯になるとお椀に賭け金を集めてマージャンに興じる。マージャンが終わるとまたご馳走を食べ、徹夜でいろいろな話をしては笑いこけて過ごしたという。スーユアン自身も、当時は「町では飢えた大勢の人たちが鼠を食べたり、のちには痩せこけた鼠しか食べない残飯をあさったりして」いたと言われており、彼女たちは周りの人たちから、悪魔にとりつかれているとさえ思われたという(24)。このような行動に駆り立てられた理由を、彼女は次のように

説明する。

苦痛に心と目を閉ざしていたわけじゃないのよ。私たちは怖かったのよ。みんなみじめだったのよ。でも、絶望するってことは、すでに失ったものを取り戻したいと願うのと一緒なの。または、耐え難い状態を引き伸ばすのと一緒なの。... だから宴会を開いて、毎週のように新年を迎えるふりをしたの。新しい週がくるたびに過去の不幸を忘れられるように。悪いことを考えるのは禁じ合っていたの。ご馳走を食べて、笑って、マージャンで勝ったり負けたりして、最高の話をし合ったわ。それで毎週のように幸運を願うことができたのよ。その願いだけが唯一の喜びだったわ。それで誰とはなしにその小さな集まりをジョイ・ラック・クラブと呼ぶようになったの (24-25)

こうして絶望のなかでわずかな幸福、喜びを見出したいという欲求から、この会が始められたのであったが、戦時下という異常な環境のなかでのこととはいえ、身の周りにいる多くの人々の窮状、惨状を無視して行われたこの狂乱の宴は、この作品に描かれた中国社会、アメリカの中国系社会の有様を象徴的に表わすものといえよう。

Ⅲ. 『ジョイ・ラック・クラブ』の幻想性の特徴

前節で見たように中国人社会は、本国であれ、アメリカの移民社会であれ、暖かみのない殺伐とした人間関係の場として描かれている。キングストンの『女武者』の描く中国人社会と何ら変わらないといえる。キングストンの描く中国は、主として農村の貧しい共同体であり、アメリカに渡るのも出稼ぎといった経済的要因が強いのに対して、エイミ・タンのそれは、比較的裕福な家庭内や家同士の関係が中心であるという違いはあるが。

これらの二作品の間にある違いは、その幻想性にあるといえるだろう。『女武者』に見られるそれは、幽霊や妖怪の登場する怪談めいた物語のもつ怪奇性

ともいうべきものであり、『ジョイ・ラック・クラブ』の場合は、より詩的な雰囲気をもった、叙情性のある幻想性であるといえる。それは四人の移民第一世代の女性たちが、スーユアン・ウーを除いて、それぞれ子供として経験した中国の話を語っていることにも一因があるだろう。彼女たちは自分たちの経験を、夢と現実を混同する子供らしい想像力で呈示するのである。その典型的な例がインイン・セント・クレアの「月の仙女」(the Moon Lady)をめぐるエピソードである。四歳のインインは、中秋節の日に一家で太湖に屋形船に乗りに行くことを知らされるが、そのとき彼女の盛装の準備をしてくれていた乳母から「月の仙女」の話を聞かされる。それは月に住んでいて、中秋節の夜にだけ姿を現わして願い事を聞き届けてくれるという。ただ、その願い事は、心に秘めた「秘密の願い」でなくてはならないという。乳母の言うには、心の中で望んでいることを口に出して願うと、その願いは利己的な欲望になってしまうのである。彼女はさらに、「女の子は質問しないで黙って人の話を聞いていなければね」とインインを諭すのであった(71)。また、とんぼを追いかけて走りまわり服を汚したインインに、男の子ならとんぼを追いかけていいが、「女の子はじっとしていなくちゃいけないわ。長いことじっとしていればとんぼのほうからやってきてあなたの陰に隠れるように止まってくれるのよ」(72)と言いきかせる。こういうところにも中国社会での女性に対する考え方が表わされているが、そうした立場にある女性の秘めた願いの象徴としての意味も、この「月の仙女」は持っている。屋形船の上でも悪戯をして服を魚の血で汚したインインは、皆とご馳走を食べることを許されず、ひとりで船縁で足を湖に浸していたが、そのときにも、「月の仙女」のことが頭から離れないでいる。

黒い水に満月が映っている。あったかくて大きくて太陽みたいな満月。私は月の仙女を探して願いをかなえてもらおうと振り向いた。その瞬間、みんなも女神を見たにちがいない。だって、花火がはじけたんだから。(77-78)

この瞬間湖に落ちた彼女は漁師の網にかかり、一家の船が見つからないまま

岸に連れ戻される。そこで彼女は舞台上で「月の仙女」の話が演じられているところに遭遇する。それは、「月の仙女」が、「弓矢の王」である夫の魔法の桃をこっそり食べたために、永遠に月の世界で孤独に暮らす運命を背負ったという話で、最後は彼女の「女は陰 … 激しい情熱がたぎる暗闇に生きる。そして男は陽、私達の心を照らす心理の輝きに生きる」という独白で終わる (81)。芝居が終わると舞台上に若者が現われ、ほんのわずかな寄付をしてもらえれば、今夜「月の仙女」が観客の願い事をひとつずつかなえてくれることを告げる。観客がみんな散っていくなかで、インインがひとり走り出て、「私にはあるわ！ 願い事があるわ！」と叫ぶが、若者は気づかずに舞台裏へと去っていく。舞台裏で「月の仙女」が扮装を解き、それが男の役者が演じていたものであることをインインが知るところで回想は終わる。そのとき「月の仙女」に何を願おうとしていたのか、インインは長い間思い出せずにいたが、人生の終わりにさしかかった彼女は次のように確信する。

でも、歳をとった今、一年ごとに人生の終わりに近づいていくにつれて、人生の初めに戻っていくようにも感じている。そして、あの日に起きたことはすべて思い出せるようになった。なぜなら、何度も同じことを味わってきたから。あのときと同じ無邪気さ、信頼、不安、不思議、恐怖、孤独——どうやって自分を見失ったかを。

今はすべてを思い出せる。そして八月十五日の今夜、ずっと昔に月の仙女に何をお願いしたか思い出せる。私を見つけてください、と願ったことを。(83)

作品に流れる深刻な自己喪失の不安は、こうした叙情的幻想性にくるまれて表現され、重苦しい雰囲気になることから救っている。アンメイ・シューと母親の悲劇的な話も、その殺伐とした雰囲気を唯一緩和しているのが、人間の思いを食べるといふ亀についての空想的な話である。それはアンメイの母親によって娘に語られるもので、彼女がアンメイと同じ年頃のときに出会ったという亀

についての話である。彼女が母親に、もう子供ではないのだからこれからは走ったり叫んだりしてはならない、「目上の人のお話を黙って聞いていなければならない」と叱られ、中庭の池のほとりで泣いていると、亀が水面に現われて彼女の涙の粒を食べたという。その亀は、「おまえの涙を食べたから、今のおまえの悲しみがよくわかる。だが、ひとつだけ警告しておこう。泣けば、いつも悲しい人生を送るだけになるよってね」と言う(217)。そのあと、亀は食べた涙の代わりに真珠のような卵を吐き出し、そのなかから「喜びの鳥と呼ばれるカササギ」が七羽生れ出るが、彼女が捕まえようと手を伸ばすと一せいに笑い声を上げながら飛び立ってしまったという。

また、サルマン・ラシュディの作品に出てくるようなマジック・リアリズム的な超能力を与えられた登場人物も見ることができる。たとえば、インイン・セント・クレアは自分が予知の力を持っていると述べている。彼女は16歳のときに最初の夫になる男と初めて会った翌日の夜に、その男のことを考えていてテーブルの花が風で落ちるのを見て、彼が自分の結婚相手になることを知り、自分の予知の力の不思議さに打たれたという(246)。結婚して最初の子供を身ごもったときも、すぐにそれが男の子であることがわかり、幸福の絶頂のときにも結婚が破局を迎えることを感じとっていた(247)。そして長い年月が過ぎ、アメリカで娘夫婦の家を訪れているときも、インインは彼らの仲がこわれていくことを予感するのであった(243)。

ウェヴァリー・ジョンのチェスの才能も、超能力的な性格がうかがわれるものであった。彼女は、「チェス盤に、人が見えないものを見ることができた。相手に見えない障害物を作って自分を守ることができた。…私は相手の動きをすべて事前に察することができた」と述べている(170)。こうした力が、母親とのいさかいの後、14歳になった頃なくなってしまった。もう彼女には、「それぞれの盤目の境目にある魔法」が見えなくなってしまったのである(172)。彼女の母親の lind・ジョンは、ウェヴァリーの才能を、自分に流れている太原の孫氏の血筋のおかげだと言い張る。それは、「頭がよくて強くて策略にたけ、戦いがうまいことで有名だった」一族なのだという(182)。こうしてウェ

ヴェリーの力の由来が中国にあることがほのめかされており、中国に超自然性、幻想性を与える方向性を見て取ることができる。

アメリカを舞台とした幻想的挿話のもうひとつの例は、インイン・セント・クレアとリーナ・セント・クレアの母娘にまつわるものである。それはインインが彼女の曾祖父について娘に話した中国での怪奇な話が発端になっている。曾祖父は、ある乞食を反逆罪で「千の切り傷による死刑」を宣告したが、刑の執行後数日して、ばらばらになった体を貼り合わせたような男が彼の前に現われ、彼が自分よりもひどい死にざまをさらすことになるだろうと予言したという。彼は病気になって二日も経たないうちに死んだのであった（102）。この話自体は中国での七十年も前のことで、インインはもう気にしていないような様子で娘に語ったのであるが、母娘は何か不吉なものが自分たちに迫りつつあるのを感じる。特に娘リーナはある日地下室に転落してから不思議なものを見るようになる。

それ以来、こわいものを見るようになった。母から受けついで中国人の目で。砂場で掘った穴の底で踊り狂う悪魔を見た。稲妻に目がついていて、小さい子供に襲いかかるのを見た。子供の顔をした甲虫を見たときは、急いで三輪車でつぶした。大きくなってからも、学校の白人の女の子には見えないものが見えた。（103）

実際、迫りつつある危険を感知できるのは、中国人の血を引く母娘だけであり、アイルランド系アメリカ人の父親はインインの脅えた様子を楽観的に受け止め、彼女は妊娠したために落ち着かないだけだと考えるが、リーナは、「どうして父は心配しないのだろう。目が見えないのかしら？ どうして母と私にはもっといろんなものが見えるのだろうか？」と不審がる（109）。結局、インインは無脳症の赤ん坊を出産し、中国で墮胎した最初の子の霊が自分に復讐したのだと信じる。不気味な話ながら、中国に超自然性の源が置かれ、中国人の血を引く人間のみが超自然的な感覚を持ち、不思議な世界に触れることが

できるということが、ここでもほのめかされている。

結 論

キングストンの『チャイナタウンの女武者』との比較で『ジョイ・ラック・クラブ』がなぜ成功し、どのような違いがあるのかを考察してみた。キングストンの作品同様、あるいはそれ以上に、『ジョイ・ラック・クラブ』は中国社会、そしてアメリカの中国系社会についても、共感や同情、和解や思いやりのない人間関係が支配する場として描かれていた。親子、それも母娘という極めて限定的な例でしか、温もりのある人間関係は現われない。むしろ、そうした社会での悲しみや苦悩のなかから登場人物たちの救済への願いが強く喚起されるといえる。そしてそうした願いは、現実に幻想が入り混じった描写でその強烈さが表現されている。「月の仙女」や悲しみを食べる亀と喜びの鳥カワセミをめぐる挿話はその典型である。このような幻想的表現が、その子供らしい純粹な想像力とともに、現実の中国系社会の殺伐とした背景を緩和している。幻想的手法はさらに、チェスでの神がかり的強さや予知能力などの超自然性を現実に溶け込ませることにまで及んでいる。そしてそれらの超自然性の源は中国に求められている。こうした幻想的手法によって、エイミ・タンの『ジョイ・ラック・クラブ』が描く中国は、その現実社会の苛酷さの描写にもかかわらず、より豊かな想像力を刺激する場所として提示され、そのために作品自体の魅力も増しているものと考えられるであろう。

参考文献

- Huntley, E. D., *Maxine Hong Kingston: A Critical Companion*, Westport: Greenwood Press, 2001.
- Kingston, Maxine Hong, *The Woman Warrior*, 1976. New York: Alfred A. Knopf, 2005.
- Shear, Walter, "Tan's Young Women Must Rediscover Their Chinese Identity," in Gary Wiener (ed.) *Women's Issue in Amy Tan's The Joy Luck Club*, Detroit: Greenhaven Press, 2008, 41-50.
- Tan, Amy, *The Joy Luck Club*, 1989. London: Penguin Books, 2006.
- Wong, Sau-Ling Cynthia, " "Sugar Sisterhood": Situating the Amy Tan Phenomenon," in Harold Bloom (ed.) *Amy Tan*, New York: Infobase Publishing, 2009, 49-83.
- マキシーン・ホン・キングストン、藤本和子訳、『チャイナタウンの女武者』、東京、晶文社、1978年。
- エイミ・タン、小川瑞穂訳、『ジョイ・ラック・クラブ』、東京、角川書店、1992年。